目白大学　文学・言語学研究
第2号　2006年1月　1－17

ウリエル・ダ・コスタ:『人間生活の実例』

訳者　工　藤　喜　作

はじめに

『人間生活の実例』の著者、ウリエル・ダ・コスタ（1585—1640）は、宗教上の理由でポルトガルからオランダのアムステルダムに移住したマラノ（キリスト教に強制改宗させられたユダヤ人）であった。もっとも宗教上の理由といっても、移住先のオランダで単純に先祖の宗教、ユダヤ教にもどるという理由からでなく、キリスト教においては得られなかった心の安心が、ユダヤ教において得られるかもしれないという動機で、一家をあげてオランダに移住したのであり、これはあまたの移住者の中でも特異な例をなしている。彼はマラノであるとはいえ、敬虔なキリスト教徒であった父のもとで、幼少の頃からカトリックの教育を受け、長ずるに及んでジェスイット系の大学で教会法を学び、大学卒業後は生地オポルトの司教座聖堂に職を得た人である。だが、彼は自分の信仰するカトリックの教え、「永遠の罰」や魂の救済に強い懐疑をいだき、種々これに関する書物を読んだが、得心が得られず、カトリックの教えに絶望し、ユダヤ教に心の拠り所を求めようとしたのである。何ごとも理性を試金石として判断するウリエルにとって、ユダヤ教の方がキリスト教よりも合理的で普遍的なものと思われたのである。（その理由は以下の翻訳の中に示されている。）

ところで、彼はユダヤ教を書物の中においてしか知らず、現実のユダヤ教を知らなかった。これを知ったのは彼がオランダに上陸し、ユダヤ教に改宗したのちであった。ここに彼の観念的なユダヤ教と現実のユダヤ教との間に克服し難い相克が生じ、それがユダヤ教に対する批判となって現れ、ラビたちを怒らし、ついに破門させられてしまったのである。

彼のユダヤ教批判は、レヴァーの主張するように、1．ラビたちの行状批判、2．旧約聖書の伝統的解釈の批判、3．旧約聖書そのものの批判から啓示宗教を否定するものであった[(1)]。彼のユダヤ教批判の歴史的、宗教的意義については、ゲプハルトやレオ・シュトラウスの論文があり[(2)]、また及ばずながら、筆者も2、3の論文において書いてきた[(3)]。このため、詳しいことはこれらの諸論文に譲り、今回はウリエル・ダ・コスタとスピノザの関係について諸家が触れていないことを概括して以下に述べておきたい。

『人間生活の実例』を見るかぎり、ウリエルは宗教の使命を人間の救済においている。この点だけを見るならば、彼の立場は啓示宗教の立場と何ら異なるところがない。しかし彼の場合、「救済」とは現世的な意味に解され（彼は魂の不滅性を否定し、精神は身体とともに滅びるという立場であった）、人間が理性的に理解される自然の法に従っているか否かによってきまるものであった。つまり、彼にとって宗教の法とは理性によって理解される自然の法であり、理性的には理解し難い啓示

くどうきさく：人文学部地域文化学科教授

宗教の法は反自然的なものとみなされた。啓示宗教は彼によれば「宗教」ではないのである。このように自然の法に基づく宗教しか認めなかったため、彼は啓示宗教が今まで人間の平和と幸福のために果たしてきた役割を否定することになった。そしてこのことによって、「永遠の罰」を否定し、宗教の賞罰の観念は現世的に理解されなければならないとした彼自身の説も否定されることになった。そして彼のいう自然宗教は理性人によってしか理解しえないものとなった。人間の本質を理性においた彼は、性善説の信奉者であり、この立場にたって人間はみな理性的に振舞わなければならないとすれば、宗教の法は究極において人間にとって不必要となるのではないか。

この点ウリエルよりも一世代以上遅くアムステルダムに生まれ、同じようにユダヤ教批判を単にことばの上だけでなく、実践において示したスピノザも破門された。しかしスピノザはウリエルのように性善説の立場ではなく、性悪説の立場にたっている。このため、非合理的な人間に対する啓示宗教の有益性を強調したことは注目に価する[4]。彼にとって祈る神と認識する神は本来同一のものであった。この同一の神をイマギナチオの立場でとらえるか、それとも理性の立場でとらえるかによって、宗教と哲学の違いが生じてくるのである。スピノザ自身は、理性の立場にたって、救済の宗教ならぬ、哲学をとなえたのである。ここに一方的に啓示宗教を否定して、自然宗教の立場にたったウリエルとの相違は歴然であると言わなければならない。

注

(1) I. S. Révah: Spinoza et Juan de Prado, p. 18, in 'Des Marranes à Spinoza', Vrin, 1995.

(2) Die Schriften des Uriel da Costa, herg, von Carl Gebhardt, Einleitung S. Ⅶ～XL. (Curis Societatis Spinozanae, 1922).
Leo Strauss: Die Religionskritik Spinozas und zugehörige Schriften, (Gesammelte Schriften, Band 1, Metzler, 1996).

(3) 「反ユダヤ的思想形成の一例について――ウリエル・ダ・コスタとスピノザの場合」、神奈川大学『人文学研究報』、1979, 6月, No. 13. pp. 2-17.
「ウリエル・ダ・コスタとスピノザ」、神奈川大学『人文学研究所報』1980, 6月, No, 14. pp. 2-20
「無神論者ウリエル・ダ・コスタとスピノザをめぐって－リムボルクとスピノザ－」、『筑波哲学』、2005, 3月, No. 14. pp. 1-15

(4) Spinoza: Ethica, Ⅳ, Prop. 53, 54 et Scholium.

『人間生活の実例』は、本邦初訳として一九七九年に神奈川大学の『人文学研究報』い発表された。現在これはほとんど入手不可能である。今回最新の研究を踏まえて、全面改訳をほどこし、要望に応えることとした。

なおこの翻訳は(1)、(2)…と章に分けているが、この区分けはラテン語原文にはなく、訳者（工藤）によってなされたものである。

『人間生活の実例』

（1）

私はポルトガルの、ふつうオポルトと呼ばれる町で生まれた[1]。私の両親は上流階層の出身で

あった。両親の先祖は、かつてこの国でキリスト教に強制改宗をさせられたユダヤ人であった。私の父は信心深いキリスト教徒であり、名誉をもっとも尊重し、品位を何よりも重んじた紳士であった。この家庭において私は品位ある教育をうけた。召使いに不自由することもなく、また馬小屋には騎乗用の血統正しいスペイン産の馬に欠けることもなかった。私は父のそのやり方を早くから学んでいた。私は上流階層の青年たちが習わしとしていた多くの学芸を修得したのち、法律の研究に力を注いだ。私の性格と自然的な傾向に関していえば、生まれつき情け深く、見知らぬ人の不幸な出来事が語られるとき、涙なしにはそれを聞くことができないほど、思いやりがあった。自尊心は私にとって生まれつきのものであった。このため、誇りを傷つけられることを何よりも恐れた。私の気質は決して卑しいものではなかった。しかし正当な原因があるならば、怒りをおさえることができなかった。私が心から抵抗したのは、いつも軽蔑や暴力によって、他人に不正を働くような、尊大なそして恥知らずの人に対してである。そして弱者を助けようとして、好んでその仲間となった。

私の人生は、宗教のために信じられないことに耐えなければならなかった。かの国の習わしとして、私はカトリックの教育をうけた。そして今や青年となり、その教えのすべてを詳しく調べようとした。私は福音書や他の宗教的な文献を読み、信仰擁護者の大全に一通り目を通した[2]。そしてそれらに心を向ければ向けるほど、より大きな困難が私の心の中に生じてきた。ついに私は解決し難い混乱、不安と困窮におちいってしまった。悲嘆と苦悩が私を疲労困憊させてしまった。相応の免罪に達し、また要求されるすべてを果たすことができるように、ローマ教会の慣行に従って罪を告白することは、私には不可能と思われた。その結果、そのような規範によってしか達せられないような救いに私は絶望してしまった。しかし私は、赤ん坊のときから親しんできた宗教、信仰によって今や心に深く根づいてしまった宗教を棄てることは困難であったため、（このことは私が22歳のときに起こったことであるが）[3]、別世界の生活について語られることがじっさいに本当に起こりうるかどうか、そしてそのようなことを信ずることが理性と一致するかどうかという疑いが生まれてきた。理性そのものがまったく相反する多くのことをとなえ、絶えずそれを耳にささやいていたからである。私はこのことを疑うばかりで、それがどんなものであれ、私がたどってきたそのような道では、魂の救済に達することができないと心に決めてしまった。この間私は前に述べたように、法律の研究に専念していた。そして25歳に達したとき、私は機会をとらえて、教会の職務、つまり大聖堂の出納方の職務についた。

しかし私はローマ・カトリック教の中に安らぎを見出すことができず、何らかの宗教に拠り所を得たいとのぞんでいたので、私はキリスト教徒とユダヤ教徒の間に大きな論争があることを知って、モーセ五書や預言書に一通り目を通した。私がそこで見出したものは、新約聖書にまったく矛盾する多くの事柄であった。そして神によって啓示されたことは、それほど困難なことを示していないということであった。これに加えて旧約聖書はユダヤ教徒によっても、またキリスト教徒によっても信じられているが、新約聖書はキリスト教徒によってしか信じられていないということであった。ついに私はモーセを信じて、律法に従わなければならないと判断するにいたった。というのは、モー

セは、すべてのものが神によって受け入れられたと主張しているし、またその際彼は自分を単なる仲介者であると宣言し、神自身が自分をこのような職につかせた、あるいはむしろそうなるように仕向けた、といっているからである。(このようにして子供たちは騙されるのである)。このような熟慮がなされたのち、今述べた宗教を何らかの仕方でかの国で告白する自由はなかったのであるから、住所を変えて、私自身の地そして父祖の地を棄てようと考えたのである。このような目的によって、私は教会の職務を他のことのために断念することに何の躊躇も感じなかった。そのときかの民族の習わしによって得られる利得や名望に思い煩うこともなかった。私は父が町の最良の場所に建てた、立派な家を見捨てた。このようにしてわれわれは、つまり、母と兄弟と私は[4]、大きな危険をおかして(ユダヤ人の子孫は王の特別の許可なしには出国を許されなかった)[5]船に乗った。私は、この宗教についていくつかの点で疑念があったが、それ以上に共鳴した点を兄弟たちに兄弟愛によって打ち明けていたのである。このようなことは私にとっては大きな禍となるものであった。それほどこの国においてそのようなことについて語ることは危険を伴うことだったのである。ついに航海を終えて、われわれはアムステルダムに上陸した。ここでわれわれが見出したことは、ユダヤ人が自由に生活していることであった。われわれは律法を成就するために、直ちに割礼の掟に従った。

(2)

ユダヤ人の風習や行事が、モーセの命じたものとまったく一致していないことに気付くには、それほどの日数を必要としなかった。しかし律法自身も要求しているように、それは無条件に遵守されなければならなかったとすれば、ユダヤ人たちのいわゆる教師たちが、律法とはまったく反する非常に多くのことをつくりあげたのは不当なことであった。私はこのようなことに我慢ならなかった。むしろ自由に律法を弁護したならば、それは神にとって好ましいことをなしているとさえ思ったのである。

今日のユダヤ人のラビたちは、彼らの昔からの習慣と意地の悪い性格を相変わらず保持している。彼らは自分たちの利益を期待して、呪わるべきパリサイ人の宗教と体制を擁護するために、熱心に戦っていた。しかも彼らは他のときには当然のこととして控えているのに、教会では最上席を占め、市場ではまっさきに挨拶をうけたがっている。彼らは私が少しでも彼らに違反することを決して許さなかった。むしろ私は彼らのすべてのやり方に従わなければならなかったのである。そうしなければ、彼らは、世俗的な事柄に関すると同様、神学的な事柄においても、共同体とあらゆる人との交わりから閉め出すといって、私を威嚇した。しかし自由のために、故郷や他の利益を断念した人間が、このような威嚇のために敗走することは、ふさわしいことではなかったし、またこのようなことで、とりわけ裁判権をもたない人たちに屈服することは、正しいことでも、また男らしいことでもなかったので、私はむしろあらゆることに耐え、自分の意見に忠実であろうと決心するにいたった。かくて私は、彼らによってあらゆる人の交わりから閉め出されてしまった[6]。かつて私を自分たちの教師とみなしていた私の兄弟たちですら、私から離れ、ラビたちを恐れて、路上であっても挨拶すらしなくなってしまった。

このような状態のもとで、私は自分のしていることが正義であることを示すために、またパリサイ人が伝え、尊重したものが空しいものであることを、さらに彼らの伝統と体制がモーセの律法と矛盾していることを律法そのものから明らかに証明するために、一冊の書物を書こうと決心した[7]。私がこのことを始めたのち、(私はこの経過全体をあるがままに明瞭にそして公平に報告しなければならないが)、私は断固としてまた首尾一貫した熟慮によって、古代の律法の賞罰を現世的な意味において明らかにし、そしてその結果、現世的な生活以外の生活や霊魂の不滅をまったく考えていない人びとの意見にくみすることになった。他の諸根拠は別として、私はモーセの律法がこれらについてまったく沈黙し、律法を遵守するか、それに違反する人たちに対して現世的な賞罰以外の何ものも約束していないことを拠り所とした[8]。私の反対者たちは、私がこのような見解に達したことを知ると、大いに喜んだ。というのは、このことだけで、彼らはキリスト教徒からの大きな支持が得られると考えたからである。キリスト教徒たちは、明らかに永遠の救いと罰を問題にし、魂の不滅性を信じ、それを容認する福音書の法の中の特殊な信仰に基づいていたからである。

このような意図に導かれ、そして私を他の点で沈黙させ、私への憎しみをキリスト教徒の間に引き起こすために、私の書いた書物が印刷される前に、ある医師による『魂の不滅について』というタイトルの書物が出版された[9]。この書物の中で、その医師は私をエピクロスの徒としてはげしく非難した。(当時私はエピクロスについてほとんど考えたことがなかった。そして私は、他の人たちの不公正な報告に基づいて、会ったこともなく、また聞いたこともない著者に対して無分別にも自分の意見を開陳した。しかし私は、2、3の真理愛に燃える人たちの彼についての評価とまた彼の教えのあるがままを知ったのちに、私が一度でもこのような人を愚かな人そして狂気の人と呼んだことを遺憾に思う。私は彼について今日でも十分な評価をくだすことができないのである。というのは、彼の諸論文を私は知らないからである。) 魂の不滅性を否定した者は、神を否定する者とさえみなされるところであった。

彼らの子供たち、ラビや両親に使嗾された子供たちは、路上に群れをなして集まり、私に対して呪詛のことばでののしり、「異端者」、「背教者」と大声で叫びながら、あらゆる種類の侮辱によって私を怒らした。ときどき彼らは、私の家の戸口のところにも集まり、石を投げて、私の心をかき乱し、私が自分の家の中でも安らぎを見出すことができないように、あらゆる手を尽くした。

私に反対する書物が出版されたとき、私はすぐ弁明にとりかかり、それに対する反駁の書を書き上げた[10]。その中で私は魂の不死性の教えに対して全力を尽くして戦った。その際私はついでながらパリサイ人たちがモーセの教に違反している多くのことについても言及した。この書物が現れると、直ぐにユダヤ人の長老や代表者たちは会合を開き、私を市当局に告発した。私が魂の不滅性を否定し、そして彼らを侮辱するばかりでなく、キリスト教をもくつがえす書物を書いたということであった。彼らのこのような告発のために、私は牢獄に拘留された。私はそこに8日か10日くらいいて[11]、保釈金と引き換えに釈放された。裁判官は、私に罰金刑を求刑した。そしてついに有罪を宣告された。その結果、書物を没収された上、300グルデン罰金を課せられたのである。

（3）

時が過ぎ去り、経験と年月が多くのことを露わにし、そしてそれに応じて人の判断が変わるにつれて、（上に述べたように、私は自由に語ることが許されよう。というのは、人びとに人生の意味と人間的苦悩の真の実例を残すために、いわば遺言書を書いている人が、死を目前にして真実を語ることさえも許されないのであろうか）、モーセの律法が神の法とみなされるかどうかという疑いが生じてきたからである。なぜなら、そこには神の法に反することが説かれているか、それともむしろそのように言わざるを得ない多くのことが書かれていたからである。ついに私は、律法がモーセによってではなく、むしろこの種のことが世の中に数えきれないほど多くあるように、人間のつくりごとにすぎないと主張するにいたったのである[12]。なぜなら、モーセの律法の多くは自然の法に矛盾する、だが自然の創造者である神は、自分自身に矛盾することもは不可能だからである。そして自然の創造者といわれる神が、自然に矛盾するようなことを人間に命ずるのであれば、神は自分自身に矛盾しよう。このことを私の判断によってはっきりさせたのち、私は次のように自問した（願わくば、このような考えが私の心に決して浮んだのではないことを）。つまり、私が死にいたるまでこのような状態にとどまり、あの聖職者や民族の共同体から閉めだされるならば、それは何の利益になるだろうか、ということである。というのは、この土地では私はまったくの新参者であり、また市民たちとは何の親交もなく、またそのことばすら知らないということである。私にとっては、彼らの共同体に戻り、彼らの欲するままに彼らを手本として従い、いわば「郷に入れば郷に従え」とした方がよりよいことである。このようなことを熟慮したのち、私は自分の意見を撤回し、彼らのいうがままに署名し、共同体に戻った。私が彼らから分かれて暮して以来、15年がたっていた[13]。私の従兄弟の一人が、この和解にある程度仲介者の役割を果たしてくれた。

それから2、3日して、私は一人の少年によって、それは私の家に預かっていた私の妹の子であるが、その少年によって私が食事、その調理の仕方、その他によって、ユダヤ人ではないと密告されてしまった[14]。この密告のために、新たなそして激しい戦いが始まった。というのは、上述の、私と教会との和解の仲介者でもあった私の従兄弟は、私の行状のために自分が非難されると思ったからである。彼は非常に傲慢、不遜な人物であり、その上無知、厚顔でもあったので、私に対して公然たる戦いをいどみ、私の兄弟をすべて自分の側につけ、私の名誉、財産、したがって私の生活の破壊と散失に役立つことなら、あらゆる手だてを尽くしたのである。彼は、私のちょうど婚約間際の結婚話を妨害した。というのは、私は当時男やもめであったからである[15]。彼は次のように事を運んだ。つまり、私の兄弟の一人が手中にしていた私の財産を私に渡さないように、そしてわれわれの間に成立していた取引関係を無にしてしまったからである。このことが、当時私がおかれていた状況からして、言うに言われぬ損害を与えることになった[16]。今や彼は、私の名誉、生活、財産に対するもっとも憎むべき敵であったと十分に言える。このいわば内輪もめのほかに、公然たる戦い、ラビたちや民族の側からする戦いがあった。彼らは新たな憎しみによって私を追及し始め、私が彼らに反感をいだくのももっともであるとするような多くのことを厚かましくも行ったのである。

そうこうするうちに、さらに新しいことが起こった。たまたま私は、ロンドンからこの町にやって来た二人の人とことばを交わしたことがあった。一人はイタリア人であり、他はスペイン人であった。彼らはともにキリスト教徒であり、ユダヤ人を先祖とする人たちでなかった。彼らは自分たちの窮状を訴え、ユダヤ人社会に入り、ユダヤ教に改宗することについて私の助言を求めた[17]。私は彼らに対してそのようなことをせずに、むしろ今のままにとどまるように助言した。というのは、彼らはどんな首かせが自分たちの首にかけられるかを知らなかったからである。このような話をしているあいだ、私は彼らにこのようなことを私の名をあげて密告しないように注意した。彼らもこのことを約束した。ところがこれらのならず者たちは、それから得られることが期待される、汚ならしい賞金をあてにして、感謝の代りに、すべてを私の親愛なる友人たち、パリサイ人たちに打ちあけてしまった。そのときシナゴークの代表者たちは会合を開き、ラビたちは怒りに燃えたち、そして無規律な群衆は、「彼をはりつけにせよ」と大声をはりあげた。彼らは私を大評議会に呼び出し、自分たちが私に対して抱いていることを、あたかも生命に関わるかのように、重苦しくそして悲しげな声で非難した。そして最後に、私がもしユダヤ人であるなら、彼らの判決を待ちうけ、それを履行しなければならない、そしてもしそうでなければ、私を再び破門にしなければならない、と告げた。卓越した裁き人たちよ。君たちは私を傷つけるための裁き人である。しかし君たちが私をある何らかの暴力から解放し、私を無傷のままに保護するために、私が君たちの判決を必要とするならば、君たちは裁き人ではなく、見知らぬ人に従属したもっとも軽蔑すべき奴隷であろう。私を屈服させようと要求する君たちの判決はどんなものであるのか。

そのとき書面が読み上げられた。それには次のようなことが書かれていた。すなわち、私が喪服を着て、シナゴークに入り、黒いローソクを手にして、彼らによって書かれた、ある種のきわめて恥ずべきことばを公開の集会において吐きださなければならないということであった。そしてその中には私のおかした不正が天人ともに許されないことが書かれていたのである。このあと、私はシナゴークの中で革の鞭か杖で鞭打たれ、それからすべての人が私をまたいで通るように、シナゴークの敷居の上に横たわること、そして決められた日に断食しなければならないということであった。この書面を読んで、私は心から激高し、心中深くいやし難い怒りで燃え上がった。だが、私は自分をおさえ、このようなことは果たすことができない、ときっぱり答えた。彼らは私の答を聞くと、私を再び共同体から追放することに決めた[18]。彼らの多くはこのことに満足せず、路上で私の傍を通り過ぎるとき、唾を吐いた。また彼らに使嗾された子供たちも同様のことをした。ただ石だけは投げられなかった。彼らにその能力がなかったからである。この戦いはまた七年間続いた。その間私は信じ難い苦難を味わった。というのは、上述の二つのグループ、一つは民族であり、他は親族であったが、それらが私に戦いをしかけてきたからである。彼らは私を罰するために私のあら探しをした。彼らは私を足下に屈服させるまで鎮まることがなかった。彼らは、私が強制されなければ、何もしないであろう、だから強制されなければならない、と囁きあっていた。私が病気になっても、私は一人で病床に伏したままであった[19]。私に何かほかに災難が襲いかかってくると、それをきわめて望ましいことのように歓迎したのである。

もし私が、われわれの間のいざこざを裁くために、彼らの仲間から裁き人が任ぜられなければならないと主張しても、全然顧慮されなかったであろう。このようなことについて市当局を訴えることは、私は当初それを試みたのだが、非常に厄介なことであった。なぜなら、裁判所に訴えることは、他の多くのわずらわしさを度外視しても、それにはまったく多くの遅滞と延引が伴っていたからである[20]。しばしば彼らは次のように言った。「われわれに従いなさい。われわれはすべて聖職者である。われわれが君に対して無礼を働くだろうとは考えてもならないし、また恐れてもならない。さあ、われわれが課したすべてを履行するように準備しなさい。その上で事の始末をわれわれにまかせなさい。われわれはすべてを適切に処理するであろう。」と。

このことがまさに問題になっていたけれども、そして暴力によって強制された従属と受難は、私にとって大きな不名誉であったけれども、事件に終止符をうち、その大団円を確認するために、自分をおさえ、彼らの欲するすべてを受け入れ、それに耐えるように固く決心したのである。というのは、私に恥辱と不名誉が課せられたならば、それらは彼らに対して私のことをますます正当化し、そして彼らが私に対してどんな考えをいだいているのか、また彼らの信仰がどんなものであるかを明らかにしたであろう。そして最後に、きわめて名誉ある人びとをもっともつまらない奴隷のように恥知らずにも扱うようなこれらの人びとの性格がいかに恥ずべきものであり、厭うべきものであるかが明るみにされるであろう。「よろしい。君たちが私に課するであろうあらゆることを私は履行するであろう」と私は言った。今や君たちの注意を、名誉心、英知、人間性を固有のものとするすべてを私に向けて下さい。そして他の権力に従属した私人たちが、私の側に何の落度もないのに、どのような判決をくだすのか、見開いた心の眼で何度も何度も凝視して下さい。

（4）

私は男女で満員となったシナゴークの中に入った[21]。彼らはこの劇のために集まったのである。時間となり、私は説教や他の儀式のために、シナゴークの中央におかれた木製の演壇にのぼり、彼らによって書かれた文書を声高く読み上げた。この文書には次のような告白が書かれていた。すなわち、私は自分の犯したことのために、つまり、安息日を守らなかったこと、信仰に忠実でなかったこと、他人にユダヤ教に改宗しないように説得したほど信仰を冒涜したことのために、万死に値すること、そしてこれらを償うために、彼らのきまりに従い、私に課せられたすべてを履行する意志があること、その上これらと似たような不都合と不敬虔を二度と犯さない、と書かれていた。私はそれを読み上げたのち、演壇をおりた。共同体の議長が私の傍らに来て、シナゴークの一角に立つように囁いた。門番が私をその一角に案内し、そして裸になるようにと言った。私は腰のところまで裸になり、頭に布をまきつけ、靴をぬぎ、腕をあげて、手をのばして柱をつかんだ。準備がととのったとき、音頭取りがやって来た。そして彼は皮の鞭を手にとり、私の背中を伝統に従って39回鞭打った。鞭打ちの回数は40回を超えてはならないというのが、律法の掟だったからである。そしてそこに居合わせた人びとは敬虔で注意深い人たちであったので、回数を越えて違反することがないように用心していた。鞭打ちの間中賛美歌が歌われていた。これが終わると私は床にすわった。そして説教師かラビがやって来て（人間のなすことは何と滑稽なことであることか）、私の破門を

解いた。かつて門によってきわめて固く閉じられ、そして私を敷居と入口から閉め出してきた天国の門がこのように開かれたのである。

このあと私は衣服を身につけ、シナゴークの入口のところに行き、横たわった。シナゴークの門番は私の頭を支えていた。やがて退場するすべての人たちは、私をまたいで出て行った。彼らは片足をあげて、私の脚下の部分をまたいで行ったのである。このようなことをしたのは、すべての人たち、子供たちや老人を含めたあらゆる人たちであった。（どんな猿も、人間にこれほど不調和な行動、笑うべき身振りを見せることはできないであろう）。そして事が終わり、誰もそこにいなくなったとき、私はその場から立ち上り、傍らにいた人たちからチリをはらわれた。（彼らが私に名誉ある振舞いをしなかったとは誰も言えない。なぜなら、もし彼らが私を鞭打っていたとしても、私のために歎き、そして私の頭を撫でていただろうから）。私は家に帰った。

あらゆる人たちの中でもっとも恥ずべき人たちよ。醜悪なものを何も恐れる必要のなかった呪わるべき聖職者たちよ。「われわれがお前を打たなければならないのだって。そういうことは夢にも考えたことはない」と彼らは言った。さて卑しい生まれでなく、生まれつき極度に内気である一人の老人が[22]、公開の集会において男、女、そして子供たち、すべての人たちの前で裸にされ、裁き人、いな、裁き人であるよりも卑しい、奴隷であるような裁き人の言いつけで鞭打たれるのを見て、それがどんな劇であるかを知る人は判断していただきたい。あらゆる悪と不正を与えられるきわめて不穏な敵たちの足に踏みつけられるために横たわることが、どんなに苦痛を伴うかを考えていただきたい。（それ以上に悪いこと、そして奇怪な驚異、それを一瞥して、その醜さに警愕して、まさに逃げ去るとしか言いようのない恐るべき怪異なことがある。）自然の、同じ父母から生まれ、同じ家の中でいっしょに教育された兄弟たちが、この目標に対してあらゆる力を結集し、彼らに対して私が絶えず慈しんできた愛を忘れ――なぜなら、これは私にとって固有なものであり、生まれつきのものであったから――、そして彼らが生涯にわたって私から受けた恩恵を忘れてしまったことである。そしてそれらの代わりに侮辱、損害、災いを得ただけであり、報告することを恥じるほど、嫌悪すべき非道なことことであった。

（5）

まだ呪いたりない私の憎悪者たちは次のように言っている。つまり、誰かが引続いて彼らの指示に異議をとなえたり、ラビたちや反対する文書をあえて書くことのないように、他の者の見せしめのために、私を罰することが正当であると。極悪の人、あらゆる虚言に屈服する人たちよ。真理を愛し、欺瞞を憎み、差別なく全人類――人類の共同の敵とはほかならぬ君たちのことである――にとって友好的な人たちに対して、君たちがこのようなことを二度と厚かましくあえて犯さないないように、見せしめとして君たちを罰するために、私は何と多くの正義をもっていることか。というのは、君たちはあらゆる民族をまったく認めず、野獣とみなし、君たち自身の嘘言で媚びへつらうことによって、図々しくも自分たちだけが天国にまでのぼろうとするからである。だが君たちは、それによって他の人たちから分離されようとする。君たちの嘲うべき、もったいぶった慣習のために、故郷を失い、そしてあらゆる人たちから軽蔑され、憎まれることが君たちにとって名誉である

以外に、君たちが真に誇りうるものは何もないからである。なぜなら、君たちが生活の素朴さと正義を誇りにしようとすれば、君たちに災いあれ。君たちがこれらの点において多くの人に劣っていることは、日の目を見ることなく明らかだからである。それゆえ、私は次のように言う。「きわめて苛酷な不幸と彼らが私の上に積み重ね、またそのことのためにわたしが憎悪されるようになった、きわめて恐るべき人格的侵害にたいして復讐しようとする力が、もし私に残されているならば、私は正義でありえたであろう」と。なぜなら、名誉を重んじる人は恥ずべき生活を好んで送ることに耐えられるであろうか。そして誰かがよく言っていたように、よく生きること、それとも気高く死ぬことは気品ある人にふさわしいことである。

しかし真理が虚偽にまさっているだけ、私の心事は彼らの心事よりも正しいのである。彼らは虚偽のために戦う。その結果、彼らは人間を捕え、そして奴隷にしてしまう。しかし私は真理と人間の生まれつきの自由のために戦う。そして誤った迷信と空虚この上ない儀式から解放された人間が、人間にふさわしい生活を送ることは、いっそうよいことである。私がもし初めから沈黙し、世の中に起こることを承認するか、むしろ口を噤むならば、事柄は私にとっていっそうよいことになった、と私は告白する。かくて人間の間で生活しようとする人にとって役立つことは、無知の大衆によってか、それとも不正義な専制君主によって抑圧されないようにすることである。――このことはよくあることである。――というのは、誰しも自分の利益のみを念頭におき、真理を抑圧しようと努力し、弱者を罠にかけて正義を踏みにじってしまうからである。だが、私は空虚な宗教にだまされ、彼らに戦いをいどむほど不注意であったから、賞賛を伴う死か、それとも名誉ある人びとにとっては、恥ずべき敗走や愚かな忍耐を伴う苦痛なき死で十分である。

彼らはいつも大衆を自分たちのために有効に利用する。「単独者としてのお前は多数者のわれわれに道を譲らなければならない。」友よ、単独者が多数者から引き離されないように、多数者に道を譲ることはなるほど有益であろう。だがすべて利益のあるものがただちに立派であるとはかぎらない。恥辱の中を敗走し、暴力と不正義に勝利を譲ることはたしかに立派なことではない。それゆえ、悪事を働き、奸策によって自分に有利なことを獲得しようとする人が、日に日に傲慢とならないように、その傲慢な人たちにできるかぎり抵抗することは賞賛に値することであることを、君たちは認めなければならない。たしかに非力な者が同類の者たちと、また羊がその仲間といっしょにいることは幸福なことであり、また敬虔なそして気高い人にふさわしいことである。しかし人がライオンと争って羊のやさしさを示すことは愚かであり、悪罵と非難にさらされる。祖国のために倒れるまで戦うことがもっともすぐれたこととみなされるならば、――なぜなら、祖国はわれわれの一部だからである――、本来的にわれわれのものであり、またそれなしにはよく生きることのできない自分自身の名誉のために、誠実に戦うことが立派でないのはどうしてであろうか。われわれが汚れた豚のように、利益というきわめて汚れた糞土の中で転がりたくないならば。

しかし私を愚弄する非道な人たちは、大衆の中にそのすべての正義を打ち立て、「単独者である君は多数者に反して何ができるのか」と言う。私は自分が君たちの大衆によって抑圧されたことを認め、それを悲しむ。しかも彼らの考えと君たちの説教によって、怒りは私の心に激しく燃え上り、

そして「不敬虔、傲慢、強情、頑固な人たちに対して、敬虔を利用することは、不敬虔である」と大声で叫ぶ。ただ一つ私が言えることは、私に力がないということである。

私の敵対者たちが、無知な民衆の前で私の評判を落すために、次のようにいつも吹聴していることを、私は知っている。「彼はいかなる宗教ももたない。彼はユダヤ教徒でも、キリスト教徒でも、また回教徒でもない」と。パリサイ人よ。君は自分が何を言っているのか、先ず考えて下さい。君はたしかに眼の見えない人である。君は悪意にあふれているとはいえ、眼の見えない人のように的外れである。どうか私に言って下さい。もし私がキリスト教徒であるならば、君は私に何と言ったであろうか。君が次のように言うのは明らかである。つまり、私がもっとも恥ずべき偶像崇拝者であり、キリスト教の教師のナザレのイエスとともに、私の離反した真の神によって罰せられるであろう。もし私が回教徒であるなら、君が私にどのような名誉を積み上げるか、誰でも知っていることである。このように私は君の口舌を免れることは決してできないであろう。私は唯一の逃げ口をもっている。それは君の民族の前にひざまずき、君のこの上もなく汚れた足に、いわば君の非道なそして忌まわしい体制に口づけをすることだけである。さあ、どうか君が上述の宗教のほかにどんな宗教を知っているか私に教えて下さい。これら三つの宗教のうち、君は後の二つを偽物とみなし、宗教ではなく、宗教から離反したものと呼んでいる。

私は君が次のことを言うのを聞いている。つまり、君は今なお一つの宗教を知っており、これこそ真の宗教であり、これによって人間が神意に叶うことができるというのを聞いている。なぜなら、あらゆる民族が、ユダヤ人を例外として（君たちは卑俗なそして低俗な人たちと結びつかないように、他の人たちから常に分離されなければならないのであるが）、君たちの言うように、ノアやアブラハム以前の他の人たちが保持していた七つの戒律を保持するならば、彼らの救いに十分だからである[23]。それゆえ、今や君たち自身によれば、たとえ私がユダヤ人の血を受けていたとしても、私が帰依することができる宗教は一つあることになる。したがって私は君たちに懇願する。私をしてあの異邦人の仲間にさせて下さい。それとも私の主張が君たちの間で認められないならば、私は勝手に振舞うであろう。かの律法を忘れてしまった眼識のないパリサイ人よ。その律法は原初的であり、大昔からあったし、永遠であるだろう。だが、君は常にのちになって成立した律法、しかも君自身が君のものを除いて非難する他の律法について言及しているにすぎない。その君自身のものについて、他の人たちは、君が欲しようと欲しまいと健全な理性に基づいて判断をくだすのである。その健全な理性はかの自然的な法の真の規範である。君はこの自然的な法を忘れてしまい、それを好んで葬り去ろうとしている。その結果、君のきわめて過酷なそして忌まわしい首かせを人間の首にかけ、人間から健全な理性を奪い、狂気の人と等しいものにしている。

しかしわれわれがこの問題に立ちいたったとき、私はここに立ちどまって、この根源的な法の卓越さについてまったく沈黙することはできない。それゆえ、私はこの法があらゆる人にとって共通なものであり、生得的なものであるという。それはまさに人間が人間であるという理由からである。これはあらゆる人を相互の愛において結びつけ、あらゆる憎悪と悪――きわめて忌まわしい――の原因であり、またその根源である不和とは無縁のものである。それはよく生きるための教師である。

また正義の人と不正義の人、醜いものと美しいものとを分ける。モーセの律法や他の法における最善のものをすべて、自然の法はすべて完全な形で自分のうちにもっている。もしそれにもかかわらず人が、この自然的な規範に反するならば、直ちに争いが生じ、心情の不和が即座に生じてくる。そしていかなる安らぎも見出されなくなる。しかし大きく違反するならば、誰が恐るべき害悪と怪物を列挙することに十分でありうるだろうか。これらの害悪と怪物はこのまやかしにその発生と成長を負うているのである。

人間の社会に関して、人間が相互によく生き、そして和合して暮らしていくために、モーセの律法や他の何らかの法は、何を最善のものとしてもっているのか。もっとも大事なことは両親を尊敬することである。次に、他人の財産を侵さないことである。生命、名誉、あるいは生命を維持するための他の財が問題となるとしても。これらのことに関して、私が尋ねたいことは、自然の法や精神に内在する正しい規範のうちに含まれないものは何であるかということである。われわれは生まれつき子供たちを愛し、また子供たちはその両親を、兄弟は兄弟を、友は友を愛する。われわれは生まれつき自分たちのすべてのものが健全であるように欲し、われわれの平和を乱し、われわれのものを暴力や策略によってわれわれから奪おうとする者を憎む。このわれわれの自然的な意欲から、われわれが他の者に関して非と認めているものをわれわれが侵してはならないという明白な判断が生じてくる。なぜなら、われわれがもしわれわれの所有物を奪う他の人たちを非と認めるならば、それはまたわれわれが他人の所有物を奪う自分たち自身をも非と認めることになるからである。

さあ、ごらんなさい。われわれは、あらゆる律法においてすぐれたものをすでに容易にもっているのである。食事に関することは、医者にまかせよう。というのは、医者はどんな食事が健康にとってよりよいか、また反対にどんな食事が健康を損なうかについて、われわれに十分適切に教えてくれるであろうから。しかし他の、儀式に関すること、つまり、典礼、規程、犠牲、十分の一税（怠け者が他人の労働を享受するために飾りたてた欺瞞）に関して、われわれが人間の悪意から非常に多くの迷宮におちいっていることを、悲しいかな、嘆かざるを得ない。このことを認識した真のキリスト教徒たちは、それらすべてを追放し、道徳的に正しい生活に関係するものだけを手許においたことで大いに賞賛に値する。われわれが多くの空虚なことに従うとき、われわれはよく生きることができない。

人は言うであろう。モーセの律法や福音書の法は、「汝の敵を愛せ」（自然の法はこれを知らない）というように、より崇高なそしてより完全なものを含んでいると。これに対して、私はすでに述べたように次のように答える。つまり、もしわれわれが自然から離れ、何かより偉大なことを考え出そうとするならば、直ちに争いが生じ、安らぎが妨げられる。果たすことができないこと、不可能なことが、私に命令されるならば、それは何の役にたつのか。敵を愛することが、本性上不可能であるとすれば、精神的な悲しみ以外には何ら善なるものはそこから生じてこない。また人間というものは、一般的にいえば敬虔と慈悲への自然的な傾向をもっているから、敵に親切をつくすことが本性上まったく不可能でないとすれば、（このことは愛情がなくても起こりうる）、われわれはこのような完全性が自然の法のうちに含まれていることを今や絶対に否定してはならないのである。

（7）

さて、人が自然の法からひどく離れてしまうとき、どのような悪が生じてくるかを見てみよう。われわれは、両親と子供、兄弟と友人の間に愛の自然的な紐帯があると主張した。この紐帯は、モーセの律法であると、他の何らかの法であろうと、それが父、兄弟、夫、友人が息子、兄弟、妻、友人を宗教のために殺せ、あるいは裏切れと命令するや否や、その実質的な法であることが無効となり、解消してしまう[24]。このような法は、人間によってなされる以上の何かより偉大なことそして何か崇高なことを要求しているのである。そしてそれが果たされるならば、それは自然に対する最大の冒涜となろう。なぜなら、自然はこのようなことを戦慄をもって恐れるからである。むしろ人間が自分自身の子供たちを、彼らがきわめて無分別に崇拝していた偶像に対して犠牲として差し出すような狂気に達したならば、私はそのようなことについて今や何と言えばよいのか。そのとき人間はかの自然的な規範に違反し、そして自然的な父性感情を汚しているのである。

もし人間が自然の限界内にとどまり、そして嫌悪すべきものを決してつくり出すことがなければ、どんなに好ましいことであろうか。人間の悪意が他人をそこへと駆りたてるこの上なく恐しい恐怖と不安について私は何を語るべきなのか。このようなものをまったく知らない自然のみに従おうとするならば、誰しもそういうものから解放されるであろう。救いについて人を絶望させるものが何と多くあることか。どれだけ多くの人びとが種々の意見に汚染されて、殉教を甘受したことか。どれだけ多くの人びとがまったく貧しい生活を自発的に送り、その体をみじめに苦しめ、他の人間の共同体から離れて、孤独と荒野とを探し出し、精神的な拷問によって永久に虐待されたことか。すなわち、彼らは、未来に恐れる悪をすでに現在において悲しんでいるのである。このようなそして他の無数の悪を、人間の悪意によって案出した誤った宗教が人間にもたらしたのである。私自身は、このような欺瞞によって大いに騙され、そして欺瞞を信ずることによって自らを破滅させた多くの人の中の一人ではないのか。私はこのようなことを経験に基づいて語っているのである。

しかし彼らは言う。もし自然の法のみが存在し、また人間が他の未来の生活を信ぜず、永遠の罰を恐れないならば、何が彼らに悪をしないように引きとめているのかと。君たちはこのようなつくりごとを考えだした（恐らく何かそれ以上のものがひそんでいるのではないか。なぜなら、君たちは君たちの利益のために他者に重荷を課そうとしたのではないか、ということが気づかわれるからである。）それは子供たちが恐怖に身震いして、いやいやながらそして悲歎にくれながら、自分自身の意志をまげて、彼らの意志に迎合するまで、子供たちを驚かすための化け物を案出するか、それとも身の毛もよだつようなことばを考え出すことに似ている。

しかしそれらのことは、子供が子供である間は役に立つ。しかし子供がその精神の眼を開くや否や、子供たちはその欺瞞を嘲笑し、もう化け物を恐れなくなる。このように君たちの所業は嘲うべきものであり、子供たちやお人よしに恐怖を吹き込むだけである。ところで、君たちの所業を知る他の人たちは君たちを嘲笑する。さて、私はこの欺瞞の正当性について論じることを断念する。このようなことを案出する君たち自身は、善が生じるように悪を行ってはならないことを君たちの法の規則の中へ数え入れている。多分君たちは、頭の弱い人に狂気を演じさせる機会をつくりながら、

他の人たちを厄介な先入観の中におとし入れることを悪に数えいれていないのである。もし真の宗教や恐怖のほんの一つの痕跡さえ君たちのうちにあるならば、君たちがこの地上の世界にこれほど多くの災いをもたらし、これほど多くの不和を引き起こし、またこれほど多くの不公平と不敬虔なことを企てるとき、疑いもなく同じような恐怖を感じなければならなかったであろう。その結果、君たちは両親を子供に対して、また子供たちを両親に対して非道な仕方でけしかけることをためらわなくなってしまったのである。

君たちに次のことを一つだけ尋ねたい。すなわち、案出された恐怖によって人間を義務づけるために、もし君たちがそのことを人間のもつ悪意のゆえに虚構し、そうしなければ人間に苛酷な生活が強いられるとすれば、君たちは自分たちも同様に何らよいことをなしえず、絶えず悪のみを行い、他人を傷つけ、何びとに対しても同情心をいだかない、悪意に満たされた人間であることを思い浮かべるはなかったか、ということである。このようなことをあえて君たちに対して質問している私に対して、君たちが怒っていること、そして君たちの誰もが熱心に自分の行為の正当性のために努力していることを私は知っている。自分を敬虔、慈悲深い、真理と正義を愛する者として自称しない人はいない。それゆえ、君たちが自分たちのことについてこのようなことを大げさに言い立てるならば、君たちは虚偽を語っているか、それとも誤ってあらゆる人間に悪意の責を負わせているかのどちらかである。君たちはその悪意を化け物と案出された恐怖によって正当化しようとする。そしてその際君たちは神を侮辱する。君たちはその神を人間の眼からするならば、もっとも残忍な刑吏そしてもっとも恐しい拷問者として示している。また君たちは人間を侮辱している。君たちは、各人がその生活において出会うことに満足していないかのように、人間がみじめさを歎くために生まれてきた、と言おうとする。しかし人間の悪意がいかに大きいものであるかを君たち自身が認め、君たち自身が私の証人となっている。というのは、君たちは格別に悪意をもっているからであり、またそうでなければ、このような策略を考えだすことはできなかったであろう。

より大きな損害を伴うことなしに、あらゆる人間からこの病いを一般に駆逐するもっとも有効な治療法を探して下さい。そして子供たちや頭の弱い人に対してのみ力をふるう化け物を遠ざけて下さい。しかしこの病いが人間にとって不治なものであれば、無能の医者のように、できもしない健康を約束しないで下さい。君たちの間で正義のそして理性的な法を制定し、善人を賞賛し、悪人を相応に罰することに満足しなさい。暴力をうけている人たちを横暴な人たちから解放して下さい。横暴な人たちが、この地上に正義は生まれない、また弱者を強者の手から救い出す人はいないと叫んではならない。たしかに人間が正しい理性に従おうとし、そして人間の本性に従って生きようとするならば、あらゆる人は相互に愛しあい、相互に痛みを分かちあうであろう。各人は他人の不幸をできるだけ軽減するであろう。あるいは少なくともいかなる人も他人を理由なく傷つけることはないであろう。このようなことに反して生じることは、人間の本性に反して生じることである。そして人間は自然に反する種々な法を考えだしたため、一方が他方を悪行によって怒らしたために、多くのことが生じた。偽りの振舞いをなし、格別に敬虔であるように装う多くの人がいる。そして無邪気な人をとらえるために、宗教という隠れ蓑を利用しながら、彼らを騙している。正当にも人

は、彼らを、何にも考えないで眠っている人にひそかにしのび寄る夜盗とくらべることができる。これらの人たちは、「私はユダヤ人である。私はキリスト教徒である。私を信用しなさい。私は君を裏切らないであろう」ということをいつも口にとなえている。おお、何という厭しい野獣よ。このようなことを何も言わずに、単に人間として告白する者は、君たちよりはるかにすぐれている。なぜなら、もし君たちが彼を人間として信用しないならば、君たちは彼に対して警戒するであろうから。しかし虚偽の神聖さという偽りのヴェールにくるまって、夜盗と同じように、不用意な人たちやまどろんでいる人たちをぬけ穴をくぐって不意に襲い、そして無惨にも絞殺する君たちを誰が警戒するのであろうか。

ある一つのことで私はとりわけ驚いている。それはじっさい驚くべきことである。つまり、キリスト教徒の中で生活するパリサイ人たちが判決を執行するほど大きな自由を享受しうるのは、どうしであろうかということである。じっさい私は次のように言うことができよう。もしキリスト者たちが非常に崇敬しているナザレのイエスが、今日アムステルダムで説教しようとすれば、そしてイエスを新たに鞭打つことがパリサイ人たちの好むところであれば、――イエスはパリサイ人の伝統と戦いそして彼らの偽善をさらけ出しているからである――、彼らはそのことを自由になしうるのではないかと。たしかにこのことは、不名誉なことであり、自由な国においては耐えられないことである。その自由な国は、人びとを自由と平和において保護することを公言するが、パリサイ人たちの不法から人間を保護していない[25]。かくて一人の人がいかなる弁護者あるいは保護者をもたないならば、その人は自分で自分を弁護し、そして自分のうけた不法に復讐しても、それは驚くべきことではない。

君たちは私の生涯の真の歴史を聞いたのだ。そして私がこの空疎この上ない世界劇場の中で私のきわめて空しいそして不安定な生活において、私がいかなる役割を演じたかを、私は君たちに示した。さあ、君たちは人間の子として正しく判断して下さい。何ら激することなく、自由に真理のための判断を下してください。なぜなら、このことがとくに真に男としての男にふさわしいことだからである。君たちに同情を喚起させるような何かを見つけるならば、君たち自身がその小さな部分であるところの人間の悲惨な運命を認識し、そして悲しむであろう。

私の名前のことも欠かせない。私はポルトガルにおいてキリスト教徒としてガブリエル・ア・コスタという名前をもっていたが、ユダヤ教徒の間では――ああ、私はこの人たちには決して近づくことはないであろう――私は少し変えてウリエルと呼ばれた。

注

（1）ウリエルは1585年に生まれた。なお彼が自殺したのは、1640年4月であった。

（2）これらの文献のうち、先ず第一にあげられるのは、トーマス・アクィナスの『神学大全』である。スペイン、ポルトルの大学ではドミニコ会のスコラ哲学が支配的であった。

（3）1608年頃、彼はまだ学生であった。

（4）彼には四人と兄弟と一人の妹がいた。

（5）ポルトガルの異端審問は当時もっとも厳しかった。それだけに改宗はきわめて困難であった。ポルトガ

ルでは1569年マラノたちの国外移住には王の特別の許可が必要であるとされた。

（6）1623年5月15日のことである。

（7）すでにウリエルは、1616年ハンブルクでPropostas contya Tradiçã（『伝統に対するテーゼ』）という、ユダヤ教の伝統に対する批判書を書いている。この論文をウリエルは、イタリアのヴェネティアのユダヤ教会に送った。ヴェネティアではこの論文を精査して、ついに1618年ウリエルを破門に処した。1623年ウリエルは、この論文に彼自身の霊魂不滅性否定の論文を加えて、出版しようとしたが、この論文の一部が彼の反対者の手に渡ってしまい、物議をかもすことになった。そしてウリエルの所説に対する反駁書が出版されたのである。

（8）これに関連して、ゲプハルトは、スピノザも同様なことを言っていると指摘している（Die Schriften des Uriel da Casta, hrsg. von C. Gebhardt, S. 265.)。T. T. P. V. p. 56, 邦訳『神学・政治論』（岩波文庫）上巻174ページ。

（9）この書物の原名はTratado da Immortalidade da Almaであり、アムステルダムの書店から1623年に出版された。著者は、ハンブルク在住の医者Samuel da Silvaであった。ゲプハルトは、多分この人がスピノザをユダヤ教へと誘った人であろうと言っているが、(Gebhardt: Ibid. p. XXIX .)、本文のウリエルのことばからすれば、ウリエルとは面識のなかった人であることがうかがわれる。

(10) 書名は『律法との比較におけるパリサイ的伝統の験証』であり、注(9)のシルヴァの著書を出版したアムステルダムの同じ書店から出版された。

(11) 1624年5月22日～31日まで。

(12) これと同じことがスピノザのT. T. P. Ⅷ. p.108, 邦訳下巻17ページにある。

(13) ヴェネティアのユダヤ教会から破門された1618年以来15年たったということである。

(14) 安息日における食事規定に反したことをさす。食料品の選択、調理の仕方において彼は自己流を通して、ユダヤ教の食事規定を無視した。

(15) 彼の妻サラは1622年12月死亡している。

(16) 彼の4人の兄弟のうち、アブラハムとヨゼフは1623年以来彼と袂を分かっていた。モルデカとアーロンのいずれかが、その当時ウリエルと共同で事業を行っていた。

(17) 異教徒がユダヤ教への改宗を希望するほど、オランダ、とりわけアムステルダムではユダヤ人は大きな自由を享受していたことを意味する。

(18) この破門は1633年から40年まで続いた。

(19) 彼の母は1628年死亡した。彼女は息子が破門されたにもかかわらず、息子と生活をともにした。もちろん息子とともにユダヤ教の掟に従わなかった。彼女が死んだとき、ユダヤ人の共同墓地に埋葬するかどうかでもめたが、結局誠実な人にはとがめ立てをすることはないということから、共同墓地に埋葬されることになった。

(20) 兄弟たちに対する財産横領の訴えである。

(21) 正確な日は不明であるが、彼の自殺が1640年4月であったとすれば、それに先立つ旬日前であったと想像される。

(22) このときウリエルは55歳であった。

(23) ユダヤ教の口伝の法、タルムードによれば、ノアの法は、モーセの律法以前にノアの子孫たちに与えられた法と解されている。それは次のような法である。(1)神とその法に対して服従すること。(2)瀆神の禁止、(3)偶像崇拝の禁止、(4)近親相姦の禁止、(5)殺人、(6)盗み、(7)生きた動物の肉を食べないことである。マイモニデスによれば、以上の七つの戒律に従う者は、諸民族の中の敬虔者、未来の世界の後継者とみなされている。

(24) 「申命記」、13章7－11参照。

(25) ウリエルの『人間生活の実例』をはじめて紹介した（1687年）オランダのレモンストラント派の牧師、リンボルクは、この箇所がユダヤ人に過大な宗教的自由を認めたアムステルダムの市当局に対するいわれなき中傷であるとしている。(Uriel Acosta: A Specimen of Human Life, Limboch's

Confutation, pp. 97f. Published 1967 by Bergman Publishers.)

この翻訳の底本としたものは、カール・ゲプハルト編集のDie Schriften des Uriel da Costa (Curis Societatis Spinozanae, 1922) 所収のExemplar Humanae Vitae (pp. 105-123)であり、また訳出にあたって同書のs.124-146のゲプハルトのドイツ語訳Ein Beispiel menschrichen Lebensを参照した。